

長野県宮田村における想起された 「大切な場所」の特質

伊藤夏歩¹・服部直樹²・佐々木葉³

¹正会員 早稲田大学 創造理工学部 社会環境工学科

(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:natu.ito@asagi.waseda.jp)

²学生会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻

(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:n.hattori0422@akane.waseda.jp)

³フェロー会員 早稲田大学 創造理工学部 社会環境工学科

(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

本研究は日常生活にて蓄積された個人の体験とその時に思い浮かべる心情や風景という両側面に着目して、「大切な場所」として想起される場所および想起内容の特性を明らかにすることを目的とする。長野県宮田村を対象に、中学生と村内住民の「大切な場所」と各場所に関する想起内容をアンケートにより収集し、テキストコーディング分析を主とする想起内容の質的分析や「大切な場所」の地図上での可視化を行った。その結果、場所により大切に思う人の世代構成には異なる傾向があることに加え、個別の体験に基づく場所の認識内容についても違いがあることが明らかになった。

キーワード:大切な場所, 想起, 個人の風景体験, 中学生, 長野県宮田村

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

景観まちづくりをはじめとして、地域の空間計画やまちづくり活動を考える際に、人々、特に住民が地域内の場所に対してどのような理解やイメージを持っているかを把握することは必要とされ、またさまざまな取り組みがある。K.リンチ¹⁾が提唱したパブリックイメージやレジビリティといった、イメージの共有性やわかりやすさといった観点から、地域の代表的な場所や空間要素を抽出することは、広くその重要性が理解されている。

一方で、自分にとって大切だと思う眺めや場所には多様性があり、必ずしも差別化可能な特徴がなく、他者との共有性も意識されていないものが少なくない。こうした場所が変化したり失われていくことは、個人としては寂しいと感じながらも、通常はその保存や維持に声をあげようとはしない。そのため一人ひとりにとっては大切と思われる場所は、その存在や価値自体が顕在化することもなく、移り変わり、忘れ去られていく。

このような地域として顕在化していないが一人一人には確実にある大切な場所に目をむけ、その価値や特質をとらえ、そこからまちづくりを展開することの重要性は、既に指摘されている。例えば、ランドルフ・T.ヘスターによる「エコロジカル・デモクラシーのデザイン」におい

ては、聖なる場所として注目している²⁾。

あるいは、地域を生きる主体に対する重要性という観点からは、西・山田による「なつかしさ」を手がかりにした風景の人間的な意味への論考³⁾のように、個人としての体験とともに記憶される眺めや場所が注目されている。視覚像としての美しさや歴史的な価値、あるいは利用価値から指摘される、言語化しやすく共有しやすい場所以外をも対象とした奥行きのある地域の姿や、アクチュアリティのある風景⁴⁾を考えていく上でも、個人的な場所への想いや認識を把握することは必要であると考えられる⁵⁾。その際には、成人に限定せず、生き生きとした感覚をともなう体験が豊富であると考えられる子どもたちも⁶⁾対象者に加えることは考えられてよい。

以上より、個人的な体験にもとづいた一人ひとりの大切な場所に注目することは、地域における価値ある場所の保全、継承、創造のあり方の議論に加えて、地域愛着や主体の安寧の感覚における場所や風景の意味や役割の議論においても、意義があると考えられる。

そこで本研究では、子どもをふくめた地域住民が「大切な場所」として自らが暮らす地域内のどのような場所をどのように想起するかを把握し、その特性について明らかにすることを目的とする。その際、大切な場所を通じて得た「個人の体験」と「その時に思い浮かべる心情や風景」という両側面に着目して分析を行う。

対象地には長野県宮田村を選定した。宮田村では2017年4月から景観計画⁷⁾が施行され、景観まちづくりが一定程度進められているほか、故郷に根ざした教育を「郷育」と呼んで村の教育大綱に位置付けるなど、子どもたちの地域への関心を高める取り組みが行われている⁸⁾。

また、地域コミュニティが継承され、宮田方式⁹⁾と呼ばれる営農の取り組みに基づいて農地が存続してはいるものの、蚕食的な農地内の宅地化や中心部の空洞化、大規模な工場の立地などによって風景が変化しつつある地域でもある。安定したコミュニティによって共有されている認識があると同時に、住民の多様化も見られる地域として、調査対象地として選定した。

以上より本研究では、長野県宮田村において中学生と村内全戸居住・就労者を対象とした「宮田村の大切な場所に関するアンケート」を実施し、回答された場所の地図上での可視化と、想起のテキストの質的分析によって、その内容分析や個人属性との関連性、場所に対して想起された感情や感覚の多様性を把握することを目的とする。

(2) 既存研究の整理と本研究の位置づけ

個人の風景に注目した研究には、風景に対する個人の認識と集団での認識の特徴を明らかにした四戸らによる研究¹⁰⁾や下北沢の商店街を対象に個人の主観にもとづく景観体験や想いの意味を抽出し、その共通点や差異を明らかにした研究¹¹⁾などが挙げられる。

また、子どもを対象とした地域認識¹²⁾や居住環境との関連性の考察¹³⁾¹⁴⁾を行った研究が存在するが、具体的な体験内容やその意味の分析には至っていない。

想起の多様性に注目した研究としては、商店街を対象に行った吉澤ら¹⁵⁾が想起 Entropy という手法を用いて、同一店舗に対する想起の多様性を定量的に把握しているが、類例研究はみられない。

本研究は、まち全域を対象とした「大切な場所」とともに想起される個人の体験や記憶を把握する点、また中学生と大人の両方を対象とする点、想起の多様性を定量的に把握する点に特徴がある。

2. 調査の方法

(1) 研究の方法と流れ

本研究では、対象地に居住・就労する個人に対して「大切な場所」に関するアンケート調査を実施し、得られたデータの質的分析から、記述された場所と心情等の特徴を把握するほか、場所ごとに想起された心情の多様性について把握する。本研究のフロー図を図-1に示す。

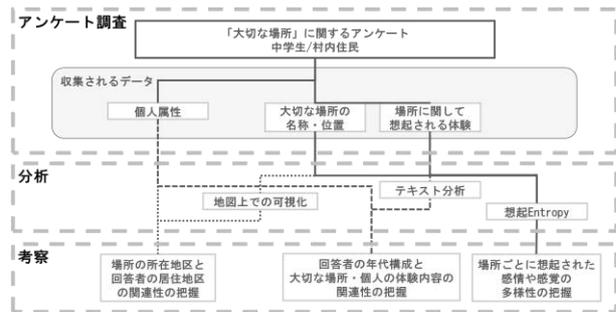


図-1 本研究のフロー図

(2) 長野県宮田村の概要

本研究で対象とする長野県宮田村は、長野県の南部に位置する人口 8,937 人の村であり¹⁶⁾、村域のほとんどは森林であるが、西から東に緩く傾斜する平地部に集落と農地が広がり、そこに町1区、町2区、町3区、北割、南割、新田、大田切、中越、大久保、つつじが丘、大原の計 11 の行政区からなる日常生活圏がある。伊那街道（旧道）沿いの宿場町と鉄道駅を核とした中心市街地とその周辺に公共施設が存在するほか、団地や工場が生活圏内に点在する。国道 153 号線や広域農道が南北の地域連絡幹線となり、東西に村内移動のための道路が通る。

西部にはレクリエーション施設の集積がみられる。村内には小学校と中学校が各 1 校、保育園が 2 箇所ある。

(3) 大切な場所に関するアンケートの概要

個人のアクチュアルな風景体験を把握するために「大切な場所」を問うアンケートを実施した(表-1)。宮田村の「大切な場所」だと思ふところの名称と地図上での位置を書き込み、それぞれについて想起する場面や心情を自由記述で求めた。村民アンケートでは属性等に関する設問を加えた。

表-1 「大切な場所」に関するアンケート概要

	中学生アンケート	村民アンケート
調査対象者	宮田中学校全校生徒	宮田村全世帯
調査期間	2020年10月19日～10月23日	2020年10月29日～11月16日
配布数（回収数）	289部（256部）	3021部（681部）
配布方法/回収方法	学校にて配布/回収	タウンプラス/郵送
調査項目	<ul style="list-style-type: none"> 大切な場所とその理由（3つ） 「大切な場所」に共通する特徴 2年前の回答と比較する質問（3年生のみ） 個人属性（学年、居住地区） 自由記述欄 	<ul style="list-style-type: none"> 幼少期を過ごした場所、場所の様子や環境 大切な場所とその理由（3つ） 「大切な場所」に共通する特徴 個人属性（性別、年齢、居住年数または勤労年数、居住地または勤務地の地域、同居人、引っ越してきた場合の理由、職業） 自由記述欄

(4) 個人の体験に関する記述の分析方法

「大切な場所」とともに思い浮かべる心情や風景の特質を捉えるために、自由記述のテキストデータの質的分析を行う。テキストデータに対して、個人の感情や感覚、体験について生成的にグルーピングしてコードを付与した。複数の意味を含む記述は該当する意味にそれぞれ分

類した。具体例を図-2 に示す。なお風景体験の意味については中内らの研究で分類された認識構造¹⁾(表-2)に基づいて整理した結果、表-3 にあげた項目を、また感情や感覚については表-4 にあげた14の項目を得た。

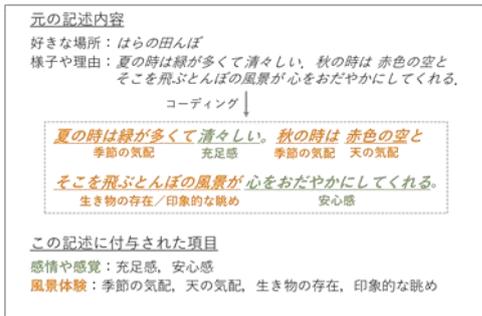


図-2 内容分析の具体例

表-2 認識構造の分類¹⁾

認識構造	説明
印象評価	視対象そのものにとらえる印象評価の類型
知覚認識	視対象を通じて「私」がいる空間や気配が知覚認識される類型
意味付与	視対象を通じて人の活動を連想する類型
メタ意味	連想される人の活動の背景にある意味や作法などのメタなレベルの意味を読み取る類型

表-3 アンケート調査で得られた風景体験の意味

表-4 アンケート調査で得られた感情や感覚

構造	風景体験の意味	説明
印象評価	幻想性	現実から切り離されたような印象をもつこと 例：神秘的に感じる/幻想的
	特別性	他にない良さを感じるといった特別な印象を持つこと 例：唯一の/この地域だけの
	公的社交	人々が交流する様子やその賑わいを連想すること 例：親子連れが笑いにぎやかの庭園祭
知覚認識	印象的な眺め	特定の時間や季節、構図の眺めを連想すること 例：その橋から見る川/中の窓から見る景色
	静けさ	人通りのなさや静かな空間の状態を連想すること 例：静か/人が通ることが少ないから
	山水の場	山や川、田の存在や気配を感じる 例：山がみえる/木などがたくさんあって/川遊び/広大な田
	季節の気配	季節の移ろいを感じる 例：春の桜/秋は紅葉が楽しめて/夏は緑の葉が生い茂る
	天の気配	空の様子や変化を感じる 例：日の出がきれい/おもしろい形をした雲/満点の星
	生き物の存在	生き物の存在に気づくこと、意識すること 例：水たがが舞う/カエルの声/魚が見える
	時の気配	時間の流れや変化を感じる 例：歴史を感じる/昔ながらの風情が残っていて良い
	神仏とのつながり	観音様の存在や気配を感じる 例：観音様の足元/神社もあってお願いごとを申したりできる
	祖先とのつながり	亡くなった親せきや昔の人々の存在を意識すること 例：先祖の墓を見た/先輩方が作ってくれた伝統がある
	意味付与	親和的な場
共同体的体験		自分が他者と一緒に何かに取り組んだことを連想すること 例：友達と遊園地をした/弟とよく遊びに行っていた
共同体の拠点		共同的な活動の拠点となっていることを連想すること 例：村の人が集まる/友達との待ち合わせ
メタ意味	私の自由な選択	自分が参加するかを自由に選択できると感じられること 例：自由に入れる/誰でも気軽に立ち寄れる
	当事者性の承認	背景にある他者との承認・協調関係が感じられること 例：ぼくたちのことを見まもってくれているかもしれない

大分類	感情や感覚	説明
肯定的感情	安心感	安心するという感情のこと 例：落ち着く/安心する
	充足感	心が満たされるという感情のこと 例：すがすがしい/明るい気持ちになれる/癒される
自身の意識	地域アイデンティティ	主体にとっての宮田らしさの意識のこと 例：田舎だからこそ見える景色/素晴らしい場所だと知った
	当事者意識	自分の居場所であるという意識のこと 例：「自分の学校」という意識が出てきた
感覚	原初性	身体感覚的な刺激を通じた場所体験の原初的な感覚のこと 例：水の音が涼しい/植物におい
	気晴らし・癒し	リフレッシュや気分が晴れると感じること (中学生アンケートのみ) 例：落ち着けてリラックスでき安心するから
	集中感	無我夢中に何かに取り組んでいたという感覚のこと 例：練習をたくさんした/全力でプレーできた
マイナスの感情	喪失感	かつて存在した風景が失われたことに対する空虚な感情のこと 例：寂れてきたのを感じ残念に思います。
	悔しさ・辛さ	悔しい思いや辛い思いのこと (中学生アンケートのみ) 例：中学校3年間で悔しい思いやうれしい思いをした大切な場所
	不安感	今ある風景が将来失われてしまうことに対する不安な感情のこと 例：歴史のある史実が失われそう
多様な感情	喜怒哀楽	肯定的感情、マイナスの感情を含めた様々な感情のこと 例：当時の様々な気持ちを思い出します
他者への意識	感謝	ありがたいと感じること 例：いろんな人のために動いてくれるので、すごありがたい
	信頼	頼りになると感じる 例：お世話になっている/心のより所の神社です
	継承への願い	後世にも残してほしいという思いのこと 例：この風景はこの先ずっとのこしていきたい

3. 大切な場所に関するアンケートの分析

(1) 大切な場所の集計

回答された「大切な場所」は、中学生アンケートでは

754個、村民アンケートでは1813個であった。名称の明らかな場所は138箇所、中には宮田村や各地区名そのものも挙げられており、村や地区への思い入れの強さがかがえた。また、家の近くの道路といった特定の名称のない場所も回答された。描写範囲の個人差はあるが、田んぼ、りんご畑、川沿いの道の回答が重なっている。

このような面としての場所の捉え方は、田園風景の広がる宮田村の人々の認識の特徴であると考えられる。

「大切な場所」の分布を図-3に示し、20名以上の回答のあった場所の名称と回答者数を示した^{注1)}。

(2) 回答者の居住地区による大切な場所の集計

「大切な場所」の所在地と回答者の居住地区との関係性を把握するため、居住地区別回答者数を集計した。地区により総回答数の偏りがあるため、構成比で比較したところ、当該場所の所在地区住民の回答割合が際立って高い場所と、その他の場所に分類された。結果を図-4、図-5に示し、図中の円グラフの赤色部分が当該場所の所在地区住民の回答割合を示す。図-4には居住地区に関わらず村全域の人に大切に思われている場所の回答割合の円グラフを、図-5には主に近くに住む人に大切に思われている場所の回答割合の円グラフを示している。

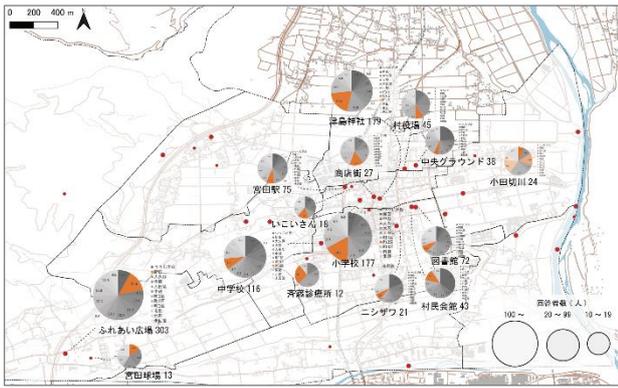


図-4 村全域の人に大切に思われている場所

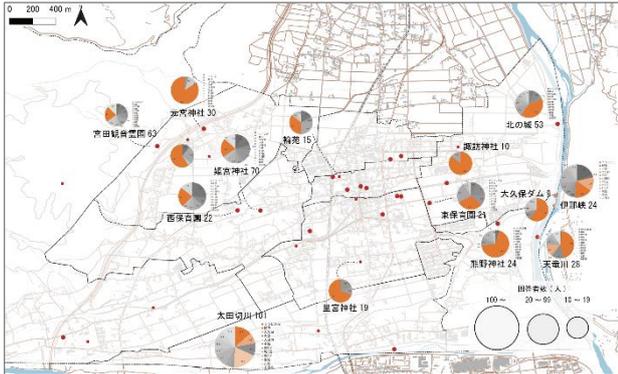


図-5 近くに住む人に大切に思われている場所

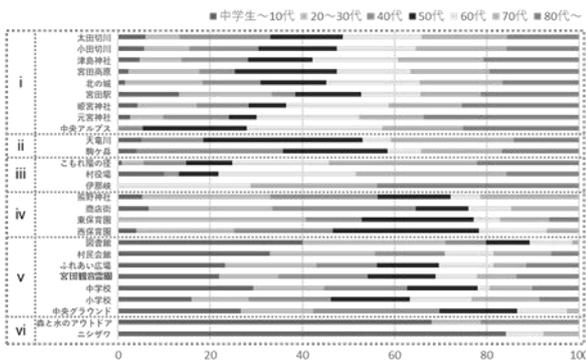


図-6 回答者の世代構成による場所の分類

(5) 大切な場所に想起される体験内容の類型間の比較

続いて、場所に関して想起される個別の体験内容について把握するため、図-6で示した6類型別に、表-3、表-4の項目の抽出割合を比較した。風景体験の意味、感情や感覚の項目の抽出割合の比較をそれぞれ図-7、図-8に示す。

(a) 感情や感覚の項目の比較

「安心感」と「充足感」については、どの類型に関しても抽出されているが、天竜川と駒ヶ岳が分類される類型(ii)では「安心感」に比べ「充足感」が高く抽出されている。山や川という自然豊かな場所においては、心が満たされる感覚を印象的に捉えていることの表れであると考えられる。

「喪失感」「不安感」「継承への願い」はいずれも主

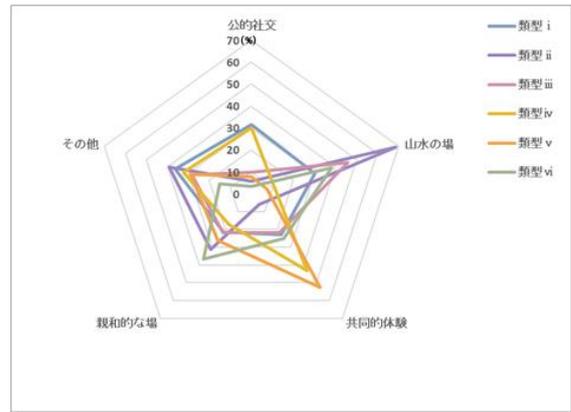


図-7 6類型別にみた風景体験の意味の抽出割合

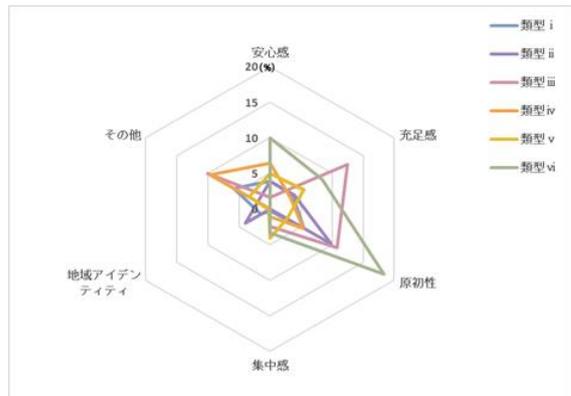


図-8 6類型別にみた感情や感覚の抽出割合

に風景の変化に関わる項目であり、各項目の抽出割合は類型(iv)が比較的高い。20代から40代の子育て世代、働き盛りの世代に選ばれやすい場所であることから、わが子を含む次世代へ継承するという意識が表れていると考えられる。

「地域アイデンティティ」については、多くの世代に選ばれやすい場所である類型(i)と類型(v)に加え、50代から70代に選ばれやすい場所である類型(ii)において抽出されている。特に類型(i)、類型(v)については、多くの世代にとってその場所に宮田村らしさが感じられている場所と考えられ、具体的には、中央アルプス、宮田駅、津島神社、宮田観音霊園である。

「原初性」については、中学生に選ばれやすい場所の類型(vi)での選択割合が高く、幼少期には見るという行動よりもその他の自身の行動の方がイメージを形成しやすいことが反映されている可能性がある。一方で、高齢者に選ばれやすい場所に分類している類型(ii)、類型(iii)に関しても比較的「原初性」の割合が高い。そこで「原初性」が抽出された記述に注目したところ、20記述中7記述が幼少期の体験であった類型(i)を除き、他の類型では幼少期の体験はほとんどなかったため、身体感覚を伴う風景体験は幼少期特有の特徴とは言い切れない。

「集中感」に関しては、主に類型(iii)、類型(v)、類型(vi)にて抽出されている。詳細は中学生の記述と大人が

幼少期や中学時代を振り返る記述であった。中でも、中学生の回答割合の低い類型(iii)については、旧中学校が位置していた村役場に関して、60代の人が中学時代を振り返る記述において抽出された。

(b) 風景体験の意味の項目の比較

「公的社交」は、人々が交流する様子やその賑わいを連想する記述である。その詳細について比較するため、記述内容をさらに3分類した。お祭りに関する記述は「お祭り」、子どもたちが遊んでいる様子に関する記述は「子どもたちの賑わい」、その他の地区行事や人々の賑わいに関する記述は「多世代の賑わい」とした。類型(i)、類型(ii)、類型(iii)、類型(iv)は「お祭り」、類型(v)は「子どもたちの賑わい」、類型(vi)は「多世代の賑わい」に関する記述が過半数以上を占めている。「公的社交」が高い割合で抽出された類型(i)と類型(iv)は、どちらも「お祭り」に関する記述であり、大きな違いは見られなかった。一方で、総記述数に占める「公的社交」の割合は少なかったものの、類型(v)に関しては「子どもたちの賑わい」を印象的に捉えている傾向がある。

「山水の場」「共同的体験」については、高齢者と中学生の回答割合が多い類型(i)、類型(ii)、類型(iii)、類型(vi)は「山水の場」が比較的高く「共同的体験」が比較的低い。一方、若年層から中年層の回答が多い類型(iv)、類型(v)は「山水の場」が比較的低く、「共同的体験」が比較的高い。ここで、3章4節で行ったクラスター分析によって読み取れた結果と合わせて考察すると類型(i)、類型(ii)、類型(iii)、類型(vi)は比較的高齢者と中学生の選択割合が高い場所であり、類型(iv)、類型(v)が若年層から中年層の選択割合が高い類型である。つまり、高齢者と中学生に選ばれやすい場所は山や川や田畑の存在や気配が感じられる場所であり、若年層から中年層に選ばれやすい場所は他者と共に過ごした体験を想起するような場所であるという傾向があると推察される。

さらに、記述された体験と一緒にいた他者について比較した。共同的体験が多く抽出された類型(iv)と類型(v)では、共に子どもや孫、友人との体験であることが分かる。さらに、類型(iv)については、地域のひととの体験が多く抽出されている。具体的には、商店街での交流や、熊野神社で催される地区活動での交流、さらに保育園にて子ども同士の出会いだけでなく親同士のつながりが生まれたことに関する記述が複数存在している。つまり、子育てを含めた日常生活の中での他者とのつながりを連想するような場所を大切に思っていると考えられる。

以上より、場所ごとに大切に思う人の世代構成の違いがあることに加え、個別の体験に基づく場所の認識内容にも違いがあることが明らかになった。これらをまとめて回答世代と体験内容の特徴を表-5に示した。

表-5 類型ごとの回答者年代と体験内容の特徴

類型	特徴
i	多世代が選択し高齢者に選ばれやすい場所 人々の賑わい、中でもお祭りを印象的に捉えている場所と、山や川、田畑の存在を連想する場所で構成されている。そして、それらを宮田村らしさとして認識している傾向がある。
ii	40代から70代に選ばれやすい場所 山や川の存在を連想する場所であり、身体感覚的な原初的な質と共に記憶されている。加えて、それを宮田村らしさと認識している傾向がある。
iii	60代以上に選ばれやすい場所 類型iiと同様に山や川の存在を連想する場所であり原初性を伴った体験である傾向にあるが、より充足感を感じられるような場所である。
iv	20代から50代に選ばれやすい場所 人々の賑わい、中でもお祭りでの人々の賑わいを印象的に捉えている場所や、我が子、孫や地域のひととの体験を想起する場所である。
v	多世代が選択し比較的若者に選ばれやすい場所 共同的な体験、中でも子どもや友人との体験を想起する場所であり、子どもたちの賑わいを印象的に捉えている場所である。また、懸命に取り組んでいたという感覚を伴う体験が想起される場所である。
vi	中学生に選ばれやすい場所 山や川や田畑を連想し、他者との体験も数多く含まれる場所である。また、視覚に限らず身体感覚を伴う体験や、懸命に取り組んでいたという感覚を伴う体験が想起される場所である。

4. 想起された場所と抽出された感情の多様性について

(1) 想起Entropy

本節では中学生、村内住民それぞれに多く想起された場所に注目して想起内容の多様性を把握するため、吉澤ら¹⁹⁾による想起 Entropy という手法を援用して定量的に分析する。ここでの多様性とは表現上の違いではなく、内容の違いに注目するため、表-4にて示した感情や感覚のコードの分類をデータとする。なお村民アンケートでは「気晴らし・癒し」、「悔しさ・辛さ」は抽出されなかったため、データ数は12である。具体的には例えば「嬉しい」や「楽しい」は表現こそ異なるが、ともに「充足感」という解釈の下では同質であるとみなすことができる。よって、この性質が異なっている記述の散らばり具合を多様性と定義し、本稿では Entropy という概念を用いて数値化を図る。また、ここでの Entropy とは情報理論や統計力学で用いられるような複雑さや乱雑さ

を示す指標のことであり、(1)の式で定義される。

$$S = -\sum p_i \log_2 p_i \quad (1)$$

なお p_i には次に説明する想起率を用いる。算出されたEntropyの値が大きいほど想起された感情や感覚に多様性があり、値が小さいほど同質性があることを示す。

(2) 感情や感覚の想起率

Entropy算出に当たり、場所ごとに想起された感情の割合、すなわち想起率 p_i を算出する。分析に際して中学生アンケートでは想起された回数が20回以上の場所について、村民アンケートでは想起された回数が50回以上の場所を分析対象とする。また、想起Entropy算出に用いる想起率とは、全回答者数にしめる当該場所を回答した人数ではなく、着目したい場所に対して想起された「安心感」や「喪失感」といった各感情の項目をその場所に想起された感情や感覚すべての和で除したものである。例えばふれあい広場に想起された感情や感覚の総想起数が(n=60)であり、ふれあい広場に想起された「原初性」が(n=15)の場合、ふれあい広場の「原初性」における想起率は0.25となる。算出結果を図-9、図-10に示す。

図-9の中学生アンケートでは、「原初性」、「集中感」、「安心感」、「充足感」の項目が多く抽出された。原初性を感じる場としては「森と水のアウトドア体験広場(n=22)」、「ふれあい広場(n=17)」を挙げている。

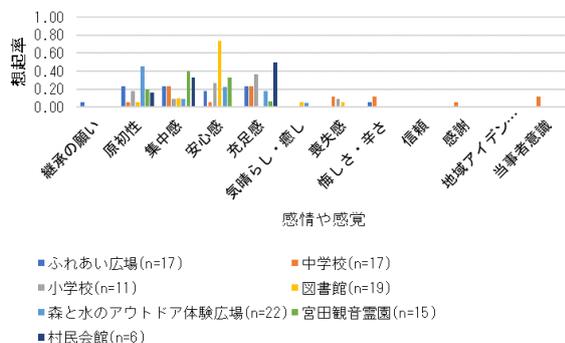


図-9 想起された場所に対する感情の想起率 (中学生)

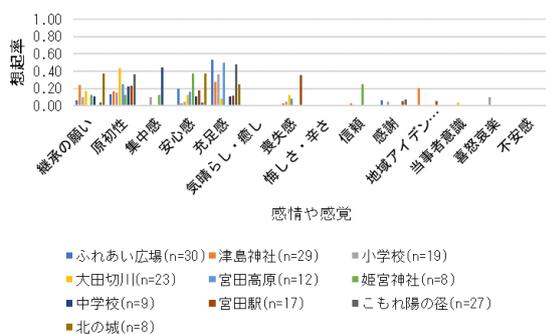


図-10 想起された場所に対する感情の想起率 (村民)

これらの場所は、宮田村の景観計画⁷⁾では、「レクリエーション・観光・生産区域」として位置づけられており、子どもたちが日常的に遊ぶ場でありながら身体的な感覚を通じて認識されたと解釈できる。

一方、図-10で示す村民アンケート結果によると、中学生アンケートで頻りに抽出された「集中感」が少ない反面、「継承の願い」が多く抽出された。その中でも「津島神社」に対する継承の願いが多く記述されていることが明らかとなった。また、中学生では「原初性」を感じる場を「森と水のアウトドア体験広場(n=22)」、「ふれあい広場(n=17)」として多く挙げていたが、村民では「大田切川(n=23)」、「こもれ陽の径(n=27)」を多く挙げており、中学生とは異なる場所を挙げる事が明らかとなった。

(3) 場所ごとに想起された感情や感覚の多様性

場所に対する想起率と想起内容の多様性の程度の関係を見るために、それぞれを軸として場所毎にプロットした(図-11, 12)。なお、場所に対する想起のされやすさと内容の多様性との関連性を明らかにするため、グラフに表記した想起率は、2節で示した感情や感覚における想起率ではなく、場所そのものを想起した割合を示している。

図-11の中学生アンケートでは中学校(n=17)が最も想起Entropyの値が高かったが、これは中学生にとってアンケート記入時現在でも通っていた場所であるからこ

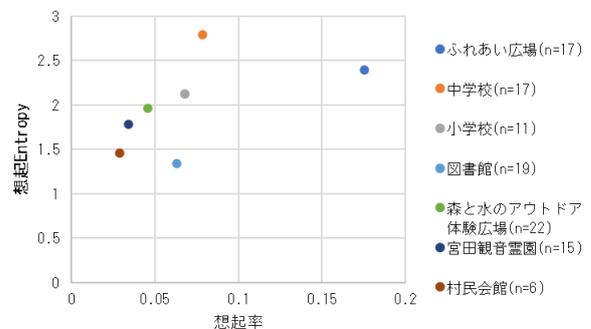


図-11 想起率と想起Entropyの関係 (中学生)

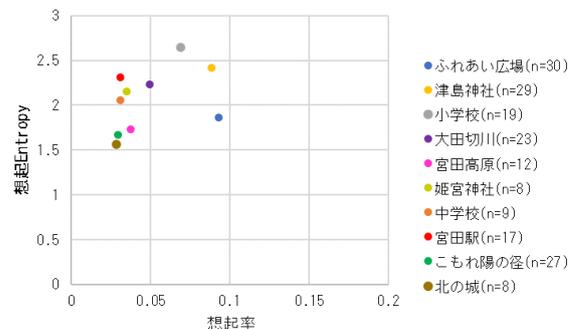


図-12 想起率と想起Entropyの関係 (村民)

そ、鮮明な記憶が集積しており、多様な想いが育まれたと推察できる。一方、抽出された感情や感覚が2番目に多く想起された「図書館(n=19)」では想起 Entropy の値は低い。これは前節の図-9 で示したように図書館に対しては「安心感」を与える場所として多くの中学生に共有されていたことが要因であると考えられる。

一方、図-12 で示す村民アンケートの結果から、想起 Entropy の値は「小学校(n=19)」が最も大きく、最も値が小さいのは「北の城 (n=8)」であった。このことから宮田村民にとって「小学校」は多様な想起をさせる空間であり、「北の城」や「こもれ陽の径」には共通する想起をさせる空間としてみなすことができる。

5. 結論

本研究では、長野県宮田村における中学生と村内住民を対象に「大切な場所」の地図上への指摘と自由記述による想起を調査した。想起されたテキストから、場所に関して想起される場面や心情が綴られ、場所ごとに一人ひとりの風景体験があり、場所に紐づく個人の体験としての場所の特質を把握することができたと考えられる。

「大切な場所」の空間特性に関しては、村全域の人に大切に思われている場所と近隣の住民に大切に思われている場所それぞれの特性を把握できた。

また回答者の属性と場所の関係については、当該場所を大切だと思う人の年齢構成のパターンによって6類型が得られた。この類型ごとに、想起される内容にも違いが見られた。また出身地によっても大切と思う場所の傾向に違いがみられた。

場所ごとの想起内容の多様性についても分析を行った結果、想起内容に多様性がある場所と比較的同質性が高い場所とがあることが明らかとなった。

以上のように、「大切な場所」という問に対しての回答を、回答者数の多寡のみでなく、場所とともに想起される内容について多面的に分析することによって、場所の価値の多元性を議論することが可能となり、地域における価値ある場所の保全、継承、創造のあり方に示唆を与えられる。個人の体験に基づく風景は一人ひとりの個人的な体験ではあるが、単に個人に内在する価値ではなく、まちづくりにおいて考慮すべき重要な要素であると考えられる。

謝辞：本研究のアンケート調査において宮田村立宮田中学校の生徒ならびにご回答いただいた住民の皆様には多大なご協力を頂いた。ここに厚く謝意を表す。

補注

地図作成にあたり「エコロジカル・デモクラシー」¹⁹⁾にある「聖なる構造」の図版 (p.132) を参照し、ハートマークを用いて場所の位置、回答数の違いを表している。

参考文献

- 1) K.リンチ著、丹下健三、富田玲子訳：都市のイメージ、岩波書店、1968
- 2) ランドルフ・T・ヘスター著、土肥真人訳：エコロジカル・デモクラシー-まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン、第5章 聖性 Sacredness, 鹿島出版会, pp.129-148, 2018
- 3) 山田圭二郎、西研：風景の人間の意味を考える「なつかしさ」を手がかりに、中村良夫、鳥越皓之、早稲田大学公共政策研究所編『風景とローカル・ガバナンス』第6章 (pp.211-245), 早稲田大学出版部, 2014
- 4) 星野裕司：親密な未知としての風景—生命論的風景論へむけた一試論—, 景観・デザイン研究論文集No.7, pp.37-48, 2009
- 5) 高瀬唯, 劉成玉, 古谷勝則：風景イメージスケッチ手法による日常生活圏内の自然を対象とした風景体験の類型化, ランドスケープ研究 (オンライン論文集), Vol.11, pp.70-81, 2018
- 6) 青木陽二：風景画の歴史と思い出に残る風景から探る自然風景評価の発達, ランドスケープ研究, Vol.63, No.5, pp.371-374, 1999
- 7) 長野県宮田村：宮田村景観計画, 2017
- 8) 宮田村教育大綱, 宮田村教育委員会, 2021 : <https://www.vill.miyada.nagano.jp/ck2/files/☆教育大綱最終.pdf> (最終閲覧日2021年8月29日)
- 9) 宮田村公式サイト_宮田方式の歴史・変遷 : <https://www.vill.miyada.nagano.jp/industry/pages/root/10480-003/10480-022/10949> (最終閲覧日2021年8月29日)
- 10) 四戸秀和・上田裕史：個人意識としての気に入っている風景と集団意識としての地域らしい風景の関係, ランドスケープ研究, Vol.76, No.5, pp.575-578, 2013
- 11) 中内和・山田圭二郎・高橋利之・川崎雅史：下北沢における景観体験・思いの意味に関する研究-主体間の差異に着目して-, 土木学会論文集D3 (土木計画学), Vol.74, No.2, 152-164, 2018
- 12) 小島周作, 服部勉, 田中伸彦, 町田怜子, 麻生恵：吉沢八景選定プロジェクトからみる都市近郊の里地里山地域における子ども達の景観認識, ランドスケープ研究, Vol.80, No.5, pp.575-578, 2017
- 13) 椎野亜紀夫：市街地および近郊地域における児童の理想とする自然環境のあり方に関する考察, ランドスケープ研究, Vol.76, No.5, pp.625-620, 2013
- 14) 建部謙治：生活空間における心象風景と地区特性との関連性—子どもの心象風景に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, Vol.565, pp.217-223, 2003
- 15) 吉澤広大・佐々木葉・高野裕作：近隣商店街を構成する商店に対する住民の想起傾向に関する研究-尾山台商業会商店街を対象にして-, 景観・デザイン研究講演集, No.11, 2015
- 16) 宮田村公式サイト_人口・世帯数_宮田村の人口及び世帯数の推移(令和3年：毎月更新)_令和3年7月1日時点人口詳細.pdf(最終閲覧日2021年8月2日)